

備陽史探訪

第79号

発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL. (0849) 53-6157

熊野町の山城跡

中世史研究の一方

会長 田口義之

いては福山市文化財年報に詳しいが、ここでは私の作成した実測図に基づいて述べてみたい。

【はじめに】

沼隈半島中の小盆地である福山市沼隈町には栄えたようである。戦国末期の「中書家久旅日記」には「山田の町」と記されている。さて同町の山城跡であるが江戸時代の地誌には黒森城、森田山城、山田城、一乗山城、高谷城等の名が記されている。しかし、これらの城名には各書によって異動があつて一つの城を二つの城名で呼ぶといったような混乱があり、昭和四十六年以降行つた実地調査では3城しか確認できなかった。その3城とは、市史跡「一乗山城」、昭和四十七年春に調査した「甲谷城」、同五十三年三月に調査した「大城」である。その中で大城は備後古城址研究会の藤井高一郎氏と共に調査し、実測図は同氏が作成、所蔵されている。又、市史跡一乗山城につ

【一乗山城】

熊野盆地の南東奥部熊野町上山田字黒木に所在し、熊ヶ峯山系の一支峯同町花咲堂西方の標高321mの山から北に延びた尾根が福山市水源地に半島状に突出する部分を利用して築かれている。城の型式は主郭を中心にして同心円状に郭を配置した円郭式山城である。

城の縄張りは最高所を削平して20×21mの長楕円形の本丸とし、その周囲には東から北を廻つて西側にかけて巾5×7mのはちまき状に二つの帯郭を築き、南方の尾根の続きは巾5×7mの4条にわたる空堀によつて断ち切つて背後の守りとしている。城郭の施設としては本丸の南に一段高く石塁をめぐらした10×18mの台地を築いている。これは物見櫓か守護神を祭つていた場所と思われる。その他石塁は帯郭の

各所にも残存している。以上がこの城の中心をなす部分であるが、他に帯郭北端から空堀を隔てて現在七面明神の祭つてある15×20mの平坦地、さらに北に50m下つた所にある南北に細長い45×20mの平地、帯郭東下の二つの削平地等も城郭の一部を構成していたものと思われる。

その他水の手は2ヶ所の岩盤をくり抜いた井戸が帯郭東下に存在する。城の東西は絶壁状に水源地に落ち込み、登山道は北麓よりの七面明神参道と西側山麓よりの小径の二本のみである。

【大城】

熊ヶ峯から西に延びた標高272mの尾根を利用して築かれた山城で最高所の主郭を中心に北、南、西に各々削り出しによつて郭を築き、背後には空堀を設けている。規模は熊の町内の山城の中では最も大きく各郭の面積も大きい。又、西方200mの所には「小城」と呼ばれる地があり、遺構は鉄塔の構築で壊されているが出郭があつたものと思われる。

【甲谷城】

別名夕目城とも呼ばれ、六本堂から東に入った甲谷の最奥部に所在す

る。城は彦山西麓の比高50mの東北から南西に細長く延びた尾根を利用して築かれている。縄張り尾根の東北と南西に空堀を設けてその間に4つの郭を直線上に連ねたもので、型式としては連郭式山城に類するものである。主郭は最高所に築かれた33×35mのほぼ正方形をした平坦地で高低差0.5mで二段に分かれ、北から東には削り残しによる土塁を設けている。又、土塁の一部北側にあるものは、上部に140平方メートルの平坦面を有し櫓台と考えられる。主郭の東北尾根続きは先述のように3条の空堀を設け尾根続きよりの敵の侵入に備えている。他の郭は主郭から南西に削り出しによつて2郭(6×13)、3郭(5×11)、4郭(15×19)と順次築かれ、この内3郭は4郭中央部に張り出すようになっている。4郭の南西下は前述の空堀で、2条設けられている。空堀から南西はだらだら坂で麓に続いている。尾根の両側は絶壁状をなし、登山は容易ではない。

【まとめ】

さて、以上の山城の特徴であるが構造からみると一番古いのは簡単な縄張りの大城で次に甲谷城、一乗山城が築かれたと思われる。甲谷、一

乗山両城は規模はほぼ同じであるが石塁が利用されている点、一乗山の方が新しい城郭であると思われる。次に占地をみると大城が熊野盆地の中央にあつて四周を眺望できる点優位を占め、他の城は盆地の周辺部にあつて不利な位置にあるといえる。

最後にこれらの点から山城を中心として盆地の中世史を考察してみると、まず最初に大城が築かれ、この城の主は盆地全体を支配していた。その後ある者が甲谷辺りに勢力を持つようになり甲谷城が築かれた。

次にある者が一乗山城を築き盆地南部を支配するようになり、最後に大城、甲谷城は廃城となり一乗山城のみ残った。このことは一乗山城主が盆地を支配することになったことを意味する。

もちろん以上のことは山城のみを材料とした1つの仮説に過ぎない。しかし、今迄はただ文献によつてのみ述べられていた中世の歴史を他の面から考へてみるのも歴史研究の方法として面白いのではないだろうか。

今後は更に他の中世遺構、地名による研究、文献史料の分析を通じて熊野の中世にせまってみたいと思う。

往古残照

鴨方往来を歩く

二谷 尚克

里庄を過ぎると、新庄・六条院・鴨方と古い地名が続きこの辺が古くから開けていた事が分かる。そこで過日往古の鴨方を訪ねてみた。

〔地名について〕新庄。新庄があれは本庄がある筈だと地図を広げると北方に字として残っていた。

六条院。古代の土地区画の方法として条里制がある。之は土地を碁盤目に区切り、条・里・坪の名称をつけ、班田収授制における口分田の配分を円滑にする。六条院の他に四条原(ら)、吉の坪、柿の坪等の地名が残る。整然と区分された田も残っている。尚、京都六条院の荘園に依るとの説もある。その他地頭、代官(代官所跡)、降矢焼場(ふるややきば) (古くは矢尻を作っていた)、丁(ちよう)(成人を表わす)、丁谷、丁前もある。豪族屋敷村を垣で囲んだ垣内・ケ市・垣ノ内・垣木・土居・土井、〇〇部等枚挙の暇がない。

三宅と大飼。三宅は屯倉(大和朝廷の直轄地)の転じた地名で屯倉を管理する集団が犬飼部の民である。金光町に大三宅・小三宅の地名が残

り、鴨方町に犬飼の地名があり、両方が一組で、犬飼部の民が三宅を管理していた事を示す。尚、日本書紀に安閑二(五三五)年詔りして国々に犬飼部を置くことある。

続日本紀の靈龜二(七二六)年八月の条に一癸亥備中国浅口郡ノ犬飼部ノ手(人名)飛鳥寺ノ塩焼戸ニ誤ッテ入ルガ訴エテ之才免ズルニ至ル」とあり、この頃浅口郡に犬飼部の存在した事が分かる。

〔鴨方往来—江戸時代岡山笠岡間の街道を言い東の鴨神社下から西の陣屋に至る〕

鴨神社。鴨方の地名の由来となつた神社で祭神は鴨別命他。境内には寛文の神社整理で廃された社を寄宮である地頭村の塵積神社に合祀したが、正徳二(一七一一)年再度大羅に移し合祀する際、鴨方藩領六三七社を移した知利積神社がある。

正面参道に掛かる橋は宮の石橋と呼ばれる立派な反り橋でそれを支える石組みも一見の価値がある。

新撰姓氏録(弘仁六(八一五)年成立)に鴨姓について記している。

応仁天皇吉備国巡幸、加佐米山(所在不明)登。その時、風御笠を吹放つ。天皇之怪。側にいた鴨別命は次の如く言上した。この事は山の神が天皇に物を奉らんとすの印也。天皇其

真偽を知る為符をした処多得。天皇大悦。鴨別命に加佐(笠)の姓を与えた。之が笠岡の地名の元でもありこの地方と鴨氏の係わりの深さを感じさせる。井原市の縣主神社も祭神が鴨別命で裏山に陵もある。

田中素我の墓。京都仙洞御所の曲屏風、杉戸にその名を残す著名な画家。寛保二(一七四二)年生れ、寛政(一七九七)年没。

西山拙斎。享保二十(一七三五)年生れ、寛政十(一七九八)年没。

朱子学者として著名で、天明八(一七八八)年幕府儒員に登用された柴野栗山(しばのりつざん)讃岐の生れ昌平講に学び、寛政三博士の一人、一八〇七年没)に「答客問」の文を送り異学を厳禁し邪説を峻絶する事が急務であると説き、之が松平定信の寛政異学の禁に影響を与えた。

又拙斎は三十九才の時京都での遊学を終え郷里鴨方に帰り、私塾「欽塾」を開き、徳を慕つて遠近より学び来る者多く屋内に入りきれない程であったと言う。加賀の前田侯、阿波の蜂須賀侯、伊予の大洲侯からの招聘も固辞して鴨方を出なかつた。

六十四才の時悪性の腫物の為永眠。鴨方神社の鹿の西山家先塋に葬られた。墓の傍らに「西山処士之碑」が建っているがこの碑は三絶の碑とい

われ、撰文柴野栗山、篆額頼春水、碑文頼杏坪、建碑の幹旋管茶山である。尚拙齋の居室は「至楽居」と呼ばれ金光町に移されている。又田中索我の「至楽居の華月橋上の拙齋」の図も残っている。

長川寺。鴨神社の少し西に曹洞宗清滝山長川寺がある。寺伝によれば源頼政（平等院扇之芝で有名）の末西山宗久（一三三五年没）が草創し英巖章傑が曹洞禪寺とした（一四一二年）。実質的にこの時を開山とする。栄枯盛衰はあったが細川下野守通董が鴨山城に拠ると菩提寺として栄え今に及ぶ。境内には細川通董の墓、西山宗久の墓、岡山藩お抱え庭師弥兵衛の作庭あり（文化年間）。

正伝寺、観生小学校、鴨方高校跡。長川寺と街道の間に正伝寺があった。元亀年間創立の真宗の寺であったが明治三十年廃寺となりその跡に観生小学校が建ったが寺門は校門として残りその姿から竜宮門と親しまれた。桃山の建築様式を今に伝えている。そして観生小学校もやがて廃しされ戦後は鴨方高校が建った。その鴨方高校も他に移り今は広場になっている。世のうつろいを思う。又この辺りは郷学観生社の建っていた所である。郷学とは藩主等が武士や庶民の子弟の教育の為設けた学校であ

る。慶応三（一八六七）年開校で校舎は草葺二階建てで、「孝経、三字経、韓非子、文選、靖献遺言」等々学び通い生と寄宿生が居た。

鴨方陣屋跡。陣屋とは小さな領主の政庁を言う。鴨方陣屋は街道の西の端の一角を占めている。明和六（一七六九）年から文政六（一八二三）年の間に設置され、東西五七米南北三三米、重々しい石垣と井戸に往時を偲ぶのみ。鴨方藩は岡山藩三代藩主池田光政が寛文十二（一六七二）年、長男綱政に藩主を継がせるに当り二男政言（まさつぐ）に二万五千石を与えて成立した支藩である。

然し藩主は岡山城下の鴨方藩邸で暮らし陣屋は少数の藩士が詰めていただけで財政面も本藩に殆ど依存していた。ただ幕末には岡山藩は討幕軍の東海道先鋒を命ぜられたが、徳川慶喜の実弟である藩主茂政は討幕にふみきれず病気を理由に引退、徳川氏にゆかりのない鴨方藩主の池田政詮（のち章政）が本家をつぎ討幕の旗印をにかけて官軍の一翼として関東、東北から函館方面を転戦し軍功をたてたのである。

町屋。街道筋には数軒の町屋が残っていてその一つは町指定重要文化財になっているが今は住む人はいない。街道は陣屋の前を南に折れて

次の角を西に折れ笠岡方面に続いている。（角に当時の石の道しるべが残っていて「かさおか」と読める。）江戸時代のタイムカプセルから出て騒音の現代に戻ったのは夕刻も近く風になる前兆か風も余り無い二号線を福山に向かった。

郷土史講座のご案内

第十回郷土史講座

系図から歴史を読む

今回の郷土史講座は、江戸時代に庄屋を務めていた家系の系図と古文書の解説からほのかに見えてくる脚色のない真実の歴史について、当会城郭研究会副部長・杉原道彦さんにお話し「歴史」だけではなく、古文書を読み解くことよって知ることができる郷土の歴史を余すことなく語って戴きます。

実施要項

- 【日時】十月二十五日（土）
- 【場所】中央公民館会議室
- 【講師】杉原道彦氏
- 【資料代】百円程度

神庭岩船古墳を訪ねて

藤井 節子

出雲人のなきながら船にのせ常世の国へ送りしか岩船古墳
 岩船古墳の来待石なる棺蓋の割れめ
 に青あを竹笹の伸が
 天海のいづこあたりを漕ぎゆくか神庭岩船古墳の魂は
 校庭の隅なる神庭岩船の古墳の魂
 児らとあそぶや

山代二子塚古墳を訪ねて

藤井 節子

茶白山は杵き出雲の神名樋野
 巨大方墳に鎮みます神はも
 二子塚古墳断面 火山灰を横
 縞に固め見る目に親し
 芝原に立つ
 二子塚古墳に眠る人や誰
 草つきれ
 する風をさきこうよ

きけ

わだつみのこえⅡ

石井しおり

(昭和)

十五年一月五日 晴

生命も体も、逞しく成長してくれ
無限への希求、兵隊とは地の果て
の人間だ。兵隊とは、光栄ある囚
人の世界に過ぎない。

【霊の夜】

体は泥にまみれ、頭脳はただ忘却
の日をつづけてゆくとも、
体内を流れる仄かな血のぬくみを
たのみ、
冬の草のように生きているのだ。

……………(後略)……………

【水汲み】

髪に野薔薇を挿し、やわらかい足
のはだしの少女が、夕日の坂を降
りてくる。
しずかな光のきらめく水をすくい
夕餉の水とするために。
……………(後略)……………

昭和十五年一月五日記、わが師田
邊利宏先生の詩である。

この反戦詩の所在を知って三ヶ月
余のある日、この為にクラスメート
に声をかけ集いを持った。鬼籍に
入って五十六年、師の君の若かりし
日の思い出を求めてである。

ああ思いがけずも、召集、入隊迄
のほんの少し残された時間に、圧縮
された鮮烈なドラマが残されていた。
先生の応召を聞いた二名の生徒が
某日、意を決して福山駅へ向った。

プラットホームで運悪く風紀係の先
生に誰何され、倉敷の親戚へと言っ
て辛うじて虎口を逃れた。

西阿知のご自宅で二人の来訪を受
けた時、先生はどんなに驚かれ、且
つ、喜ばれたことか。当時はご多分
に漏れず、きびしい規制の日夜で
あったから。

先生のお母さまも交えて、厚いお
もてなしの末、駅前の映画館へ伴わ
れた。暗い場内で同行の一人が、乗
物酔いで青い顔をしているのを目ざ
とくごらんになった先生は、「おま
え、大丈夫か」と、やさしく手をか
けて問われ、彼女は緊張とはづかし
さで背をふるわせて、「こっくり」と
返事をしたそう。

父兄同伴でも許可されなかった映
画館入場を、先生はどんな思いでこ
のひとときを、お過ごしになったの
であろう。死の口が大きく開いてい

る運命を知ればこそと思いやる。当
然生徒への責任問題を一身に負われ
てのことと思う。

集いの当日は、激しい暴風雨の日
であった。おいで下さるのは無理か
と空を見上げているところへ、ずぶ
濡れの彼女達が雨をしたたらせ乍ら
現れた。忽ちのうちに潤む目、それ
を聞いて涙する私。

思いを成就した二名は、そののち
いづくから洩れたのか、しばらく教
員室の廊下に立たされたそうである
懲罰のために。

【夜の春雷】

……………(前略)……………
いま、俺たちは三月の長江を下っ
ている。

しかし、荒涼たる河南省に、十名
にあまる戦友を埋めてしまったの
だ。

彼らはみなよく戦い抜き、息絶え
た。

塵の吹きすさぶ中で、彼等をはこ
ぶ俺たちも疲れはてていた。

新らしく掘りかえされた土の上に
俺たちの捧げる最後の敬礼は悲し
かった。

悲しい護国の鬼たちよ
ごうごうと鳴る春雷の中から
君たちの声が聞こえてくる。

……………(後略)……………

せめてせめて、瞬時の間でも、教
え子二人と観たスクリーンや肌の温
もりを泥濘の戦野で思いおこして下
さったであろうか。

一九四一年八月二十四日 戦死
享年二十六才
一九九七年八月二十四日 記

バス例会のご案内

十二月度バス例会

雲井城登山例会

十二月度のバス例会は、庄原市
高町にある雲井城に登ります。雲
井城は山内首藤氏が築いたと言
われる山城です。現在でもその山
頂には立派な石垣が残されてい
ます。

《実施要項》

●日 時 十二月七日(日)
午前七時半集合

●参加費

会員 三、七〇〇円

一般 四、〇〇〇円

●募集人員 四五名

●受付開始 十月二十一日(火)より

☆弁当、飲み物持参。山歩きので
きる服装、靴でご参加下さい。

☆雲井城は峻険な山城ですので、
この例会は健脚の方向きです。

常陸旅行記後日譚

門田 幸男

行って来ました。これこれでした。

これで終りでは探訪の会会員らしさに欠けるので、なぜ日立でなくて常陸と書くのかを考えてみました。常陸国風土記の冒頭に「常世の国と言うのは、この国のことではなかるうか」と書いてありますから、常世の陸と表記するに至ったのでありましょう。どこよりも早く日が立つ所とは東の端にあるからです。

そこで、東とは何を意味するのかを陰陽思想(易も又陰陽思想)で探りますと寅卯辰の春の三ヶ月です(時間の単位として)。春は野も山も草木がきそって芽吹く季なので木気が割り当てられています。ここで八卦配当表を見ると、東に割り当てられているのが長男(注1)の震で自然現象では雷だとされています。鹿島の神が雷神だとされるのはここから来ているのでありましょう。だが建御雷をすなおに読むとタケミイカヅチであってタケミカヅチとは読めません。

そこで又風土記の文章を探ってみますと、ヒントになる文章があります。那賀郡の茨城の里の條に「ヌカヒコ、ヌカヒメの兄妹が居た。名も知らぬ男が、求婚に来て妊娠し月満ちて小蛇を産んだ。はじめ杯(坏・盃)に入れておいたが、すぐに一杯になったので盆(瓶・甕・大きなかめ)にかえたが、又一杯になった。(中略)盛つた盆は今も片岡の村(注2)にありと。盆の中に居る蛇神すなわち蛇ツ霊であります。

では蛇神と雷神とはどこで結び付くのでしょうか。東に割り当てられているのが震(雷)でありますが、その東は木気でその守護神は鱗族(竜蛇)なのであります。五行では蛇神、神易では雷神となるのです。

このタケミカヅチを祀つた鹿島神宮に要石なるものが置かれていて地下のナマズを押さえて地震を予防していることになっていますが、ナマズ押さえなら京都や江戸などの人の密集する所に置くべきであり、鹿島神宮に置くことの説明にはなりません。タケミカヅチ即ち雷神イコール震なのですから鹿島の神こそ震動する神なのですと仮定しても直径三十センチ程の丸石で大地の震動が押さえられるのかと疑問に思われるでしょう。

説明板によると地下深くへつながつているとされていますが、丸く

て白い石を考えてみますと、昔の考え方で天球とか天円地方とか言つて天は丸いと見られていました。又、石は堅い。乾(天)は堅に通ずると言つて天は剛く、地は柔らかいと考えられていました。その上に天(乾)は六白金氣(九星)でありますから白くて丸い石はたとえ小さくても天(宇宙)に並ぶ大きさと威力を持つとされていたのです。

その天は金氣の故に金剋木の理(金屈刃物で植物は殺される)によつて木氣の雷神「震」のタケミカヅチは暴れられなくなるのです。同じ理屈で白くて丸いて固い大豆(天を表わす名)は火熱で殺されて鬼と呼ばれて投げ捨てられるのも金氣を排除して木氣の春の到来を確かなものにしようとしているのであります(鬼は大豆自身を言うのです。念のために)。又、食べる行為は徹底的殺し方です。

【補注】

1この故に皇太子の居所を東宮と言ふ。

2日立市に大ミカ神社あり。

古墳講座Ⅳ

松永湾岸の古墳見学会

十一月の古墳講座Ⅳは十月に引き続き松永湾沿岸の古墳を探訪します。

四世紀から五世紀初頭にかけては加茂や神辺などの内陸部に首長墓とみられる古墳が多く造られますが、その後は松永湾沿岸に移動します。

五世紀は対中国との関係で瀬戸内沿岸が重要視されたものと考えられています。

長波(おさば)一号古墳は今津町長波にある横穴式石室の古墳ですが、備後南部では最古式のものとしてあります。松本古墳は神村町にある直径約五〇mもある巨大円墳で、造り出しの痕跡が認められ、埴輪も出土しています。この二基以外には高岩一号古墳も探訪する予定です。

《実施要項》

《日程》 十一月一日(土)

《集合場所》 福山駅北口

《集合時刻》 午後一時三〇分

★現地に近い方は、松永駅北口に午後二時に集合。

《受付》

十月二二日(水)～二四日(金)

午後八時～九時。

山口部会長宅へ。

☎〇八四九(四五)六一七三

歴史と祈りの道

熊野大社をたずねて

柿本光明

錫杖を手に、兜巾をいただき、篠懸け衣に行者足袋といういでたちで順峰奥駆修行を行う山伏に出会うのも紀伊国熊野らしい風景である。霊気ただよう熊野なればこそ、自然に溶け込む姿であると言えよう。修験道は山岳信仰を母胎とし、奈良朝の頃から、我が国の古神道や天台や真言の仏教教義を包含する思想の中から芽生え、開立流布したのである。難行苦行によって神験を習得するもので、修行の場として霊地を選び、中でも熊野の聖地がこの上ない崇高な理想郷とされてきた。

鎌倉時代初期の熊野修験者の峰入について記した『山伏帳』によれば、柿色の篠懸を身につけて、袴をはき二重兜巾をいただき、笈を背負って峰入したことが記されている。

延喜七年(九〇七)には宇多法皇の御幸があった。これが熊野御幸のはじめで、こののち上皇の御幸はおよそ一〇〇度に達した。熊野詣の風習は一世を風靡し、熊野三山信仰は全国の諸社にこえるほどであった。

本社には十四座の神々が御鎮座に

なり、御主神は家津美御子大神(素盞鳴尊)で、大神鎮座の年代は明らかではないが、神武天皇の御東征以前に既に御鎮座されたと伝えられ、第十代崇神天皇の六五年に社殿が創建された。(熊野本宮大社による)

家津美御子大神は、海原を治められた後、出雲の簸の川上流にお降りになり、国土の経営に当たるとともに、遠く大陸をも治められたと伝えられ『紀伊統風土記』には「大神御身の御毛を抜きて、種々の木を生じ給い、其の八十木種の播生れる山を熊野とも木野とも云そるより、熊野奇霊御木野命と称え奉るべし」と記されており、このことから、紀の国(紀州)の名の起こりは、木の国から転じたものとされている。

また熊野三山は熊野三所権現、熊野権現ともいう。全国に散在する熊野社の総本社。なお、三社(一九五〇年)はそれぞれ熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社と改称した。熊野信仰を語るに際し、無視できないのが、熊野牛王神符である。

この神符には、独特の鳥文字が使われるところから、俗に「おカラスさん」と呼ばれている。八十八羽の鳥の組合せによって、右に「熊野」左に「爾」と書かれ、中央に熊野修験者が常に身につけている「鉢」を

形どったデザインが施されており、その上に火を表す朱色の神印を押し込めたものである。

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、出雲の熊野大社について次のように記している。

こういうことを聞いた。

大社は毎年、新しい火鑽を受ける。この火鑽は、杵築でつくられるものではなくて、熊野でつくられるのである。熊野には、火鑽のつくりかたの規則が、神代から伝わって残っている。なぜ、熊野から火鑽を受けるのかというと、出雲の初代の国造の時から、出雲大社の火鑽は今もつて熊野でつくられるのである。

このように熊野大神は出雲の象徴する神として信仰され、熊野大社は「出雲一宮」と尊崇されて、火鑽の授受の祭事も今も昔のままに十月十五日に行われている。

「熊野」という地名は、紀伊(和歌山県)にもあって、出雲の「熊野」と二つの「熊野」については、昔からいろいろ対立した説がある。享保二年(一七一七)の『雲陽誌』という書物によると、紀伊国の熊野信仰と関係があると考えられる熊野神社は、出雲国だけでも六十一社を数え、現在全国に三千社余りもあると

いわれている。また、この「熊野」にからんで、紀伊と出雲の地名や神社名、伝承などに共通点があったり『古事記』と『日本書紀』では内容が異なっていたり、神話の解釈上興味深い点がみられる。

出雲国の熊野大社は「延喜式」では「熊野坐神社」と記されている。紀伊国にも、今の熊野本宮が、「熊野坐神社」と記されている。

このような奇妙な一致点については、もつと神話などの全体的な検討が必要だが、様々な解釈や憶測を生んでいることも確かである。

出雲の熊野大社の勢いが衰えていった原因は、出雲国造が杵築へ移ったことや杵築(出雲)大社との兼ね合いだけではなかった。その原因の一つと考えられるのが、紀伊国から始まった熊野信仰の全国への広まりであった。

もともと紀伊国の熊野地方は神聖で神や仏の住む地だと信じられていた。平安時代になると、山にこもって心や体を鍛えたり神や仏につかえようとする修験行者がたくさん熊野地方を訪れた。また都の貴族たちの間でも信仰を集め、「熊野信仰」という信仰が生まれた。

ここで、一つわからないことがある。いつたい紀伊国の熊野と出雲国

の熊野は、どちらが先に始まったのかという問題である。出雲国では、紀伊国の熊野信仰が出雲国へ伝わる前から出雲の熊野大社が存在していたのは事実であり、熊野大社に残る言い伝えによると、近くの村の炭焼き職人が紀伊国へ移りすんだときに熊野大社の神主が熊野大社のご分霊を持って一緒に行き、それをまつたのが現存の紀伊国熊野本宮大社である、としている。

ところで、出雲熊野大社の境内に入ると、あちこちに「大」の字が書かれていることに気付く。拝殿の屋根の中央、灯籠、拝殿内のほんほり舞殿に下げられるちようちんなどにある。この「大」の字マークは正式には「一重亀甲に大の字」といい、出雲熊野大社のシンボルマークであり「神紋」である。

先年、芸北地方を探訪したとき、芸備線熊野駅（現在は比婆山駅と改称）から田鋤、長者原、別路、尺田に至り内尺田というところに熊野神社が鎮坐されている。当社の創建は不詳なるも元明天皇の和銅六年までは比婆大社と称し、仁明天皇の嘉祥元年社号の改正ありて熊野神社と改称するにいたった。

広く「お熊野祭り」と呼ばれる祭礼は、かつては御陵の山（奥宮）が

主体であったがその盛況を「比婆山考証」によると

「比婆山神陵並に熊野神社例祭は往古より旧暦三月二十九日に執行せり。依って参拝人は近郷はもとより雲・伯・石の各州よりおびただしい登山参拝ありて、諸作の豊穰を祈り、また諸病平癒を祈願するに神験著しき由：中略：明治六・七年頃は毎日三・四百名、陸続として絶ゆる日なき由なり。既に明治九年には日々幾千人となり連月二十八・二十九日は一万より三万にんに及び由……」

ともあれ、比婆山、熊野信仰は古くから広い信仰圏をもち、江戸時代にも雲・伯州の崇拜者から鳥居や玉垣などの寄進があり、信者は大戦頃まで神の使いの「鳥」を描いた神札を授かり、虫除けに田圃に立てる風習があった。特にチリゲ（小児のかんの虫）封じに靈験あり、二ノ宮は婦人病やもめごと祈願の神として知られている。戦後の衰退期をこえてこの地帯が国定公園に指定され、県民の森が開発されるにつれ、例祭日より観光や山歩きのコースとして登拝するものが多くなった。

「広島県史原始古代編」の項において、「比婆山」の所在につき諸説をあげて論究されているが「広島県史

原始古代編」の「解説―神話」の項では、「古事記」のいう比婆山の所在が雲・伯の国境であるとともに、備後の国境にも近い山地と考えられていたことにまず疑問はない」と述べてある。

山頂は伊邪那美命の神鎮まり磐座を中心に、一見古代祭祀の遺跡を偲ばせる。この御陵の峯へ備・雲・伯州の四方から参道が登り、各山麓に神社が（逢拝所）がまつられている。その南正面参道の登山口の社がここ尺田の熊野神社である。

社記に嘉祥元年（八四八）社号を比婆山神社から熊野神社と改めたところがあるので、出雲の熊野神社との関係も十分考えられるが『芸藩通史』には「熊野本宮、熊野新宮、飛龍社ならびに入江村尺田の山中にあり、飛龍社は紀伊国熊野神社記を考えるに仏神習合せしものと見ゆ」とあり「国郡志尺田」には本社祭神熊野権現二ノ宮祭神新宮権現、三ノ宮祭神飛龍権現とある。これは紀伊の熊野本宮、熊野新宮、熊野那智飛龍権現の紀伊の熊野三所権現そっくりであって、明らかに熊野修験山伏によって比婆山神社が行者観請社に変貌したものと考えられる。神札は紀伊国熊野大社と同じ鳥文字であり、宝印も鳥の図柄をあしらっている。

十一月度徒歩例会のご案内 瀬戸町の史跡めぐり

―長和庄の故地を探る―

十一月の徒歩例会は、鎌倉時代備後守護を務めた長井氏の所領として有名な長和庄の故地を、田口会長・桜井須磨子女士のご案内で探訪します。会員の皆様、ふるってご参加下さい。

《募集要項》

〔日時〕十一月十六日(日)午前九時

〔場所〕瀬戸町長和

トモテツ高浦バス停

〔講師〕田口義之会長・桜井須磨子女士

〔主な探訪地〕

・ 場山城跡(長和氏の居城)

・ 福居八幡神社(長和庄の総鎮守)

・ 平木堂(文保五年銘五輪塔台座)

・ 尾越城跡(栗田城ともいう)

〔会費〕五〇〇円(資料代保険代)

〔解散〕午後四時、現地解散予定

〔定員〕百名

〔受付開始〕十月二十日午前八時

〔バス〕

瀬戸經由新川・熊野方面行

駅前発八時、二十分、四十分

所要十分 片道大人二百十円

※雨天中止、お弁当・飲み物持参

元禄検地帳正文の謎

小林 定市

水野家四代目福山城主水野勝種が元禄十年(一六九七)八月二十三日に福山で卒去すると、七男の勝岑は同年十二月二十二日に父の遺領を相続した。勝岑の兄達が全て早世したため、一歳で家督を相続する事となったのである。

幼なくして領主となった勝岑は、將軍に襲封の御礼言上の為翌十一年三月福山を出発したが、旅の途中病にかかり五月五日江戸に於いて死去してしまった。領主が不在となった水野家は將軍家に奉公出来なくなり継嗣断絶によって改易となった。

福山十萬石は幕府領となり、幕府代官が福山領を支配する事になった。幕府は備後福山領が幕領となった機会に、元禄十二年正月、備前岡山藩に対し福山領の総検地を実施するよう命令を出した。岡山の検地役人は同年五月下旬から検地を実施し、五ヵ月後の十月上旬には山林と藪の検地も完了させ、岡山に全員引き上げて行った。

この時の記録を元にして、後日作成されたのが元禄十三年の検地水帳

で、福嶋氏の検地帳や水野時代の坪地詰帳では、六尺五寸の間竿を用い三百歩を一段とし、田畑一筆当たり

の收穫高を記入した。しかし、元禄の検地水帳では前記の方法と異なり、六尺一分の間竿を以て一段三百歩とし、高面積のみを記載し收穫高の記入を留保し、石盛りは幕府が決定した。

検地帳は貢租の基礎台帳になっていたことから、検地帳の正文は藩役所で用いられ、藩役所から広島国税庁に移された後、広島大学に払い下げられた検地帳がある。

水呑村の検地帳が広島大学に収蔵されている事を知り、閲覧願いを申請したところ、大学のご好意により水呑村の寛文十一年の坪地詰帳他、元禄検地帳の閲覧を許可された。本年七月八日大学の図書館で、水呑村の検地帳二十四冊を整理すると驚いた事に、元禄十三庚辰年五月の(備後国沼隈郡水呑村御検地水帳)四冊之内、壹番帳・貳番帳・参番帳「沼隈郡水呑村歳年貢小前帳」が各々二冊、合計八冊の正文を確認する事が出来たのである。

検地帳の正文は各村の役場と、藩役所の双方に一部保管されているものと想定していたが、藩役所に二部保管されていたとすれば、村役場の

一部を加えると、正文は三通作成されていた事になる。

一方、水呑村庄屋から村役場、福山市との合併に伴い福山市に移管されたと推定される、元禄検地帳他近代の資料約百四十余点があった。福山市史編纂会の事務局井上伸二郎氏は「福山市史」のあと

がきに、「戦災をまぬがれた周辺に於ける市役所の各支所(水呑村)に収蔵されていた、検地帳。その他の重要史料を中央に集め得たことも一つの

大きな收穫となりました。」と記され、また昭和四十六年三月に福山市史編纂会から発行された「収蔵者別近世資料目録」の(水呑支所)の欄に、元禄検地帳他に一四六六の記載が見られた。

そこで、昭和六三年五月福山市に対し、水呑の近世近代資料の閲覧を請求したところ、市側から返書による回答は、「資料目録中、福山城文書とありますが、現在のとこる文書館には保管いたしておりません。目録編纂

時の間違いかと考えられます」との返事に疑問は解消しなかったが、出来れば三冊の正文を一カ所に集めて研究したいものである。

◀ 広島大学所蔵 水呑村検地水帳



油木八幡の 大般若経について

出内 博都

はじめに

油木鶴亀山八幡は、所伝によれば、延喜二年(九〇二)、豊前宇佐より勧請した古社で、千年にわたる歴史をもっている。神域の広さも三万余坪で、おそらく県下の八幡社のうちで最大のものと思われる。

ここに伝来する大般若経は、応安年間の筆写による折本形のもので、おそらく神石郡に現存する文書としては最古のものと思われ、かつ南北朝対立の動乱期のもので、備北における南北朝対立史の解明の点からも多くの興味ある問題を含んでいると思われるので、以下その概要を述べ、各方面のご指導とご批判を仰ぎたい。

一、現況

(1) 箱書

大唐櫃三個に二〇巻を一帙として入れている。箱書には、永徳二年(一三八二)に尾道浦より当八幡に寄進したことが朱筆で書かれている。

(2) 遺存状況

経巻は著しく散逸、破損していたが、整理の結果は次の通りである。
①首尾一貫して完全に現存するもの

三〇八巻
②経巻の一部が散逸しているが、巻番号の判明したもの 二〇四巻
以上計 五二二巻

残り八八巻は散逸して巻数不明のものであるが、これも断片がおびただしく現存しているもので、これを整理したら大部分は復元可能と思われる、元は六〇〇巻の完本であったと考えられる。

(3) 書写年代

第一巻は紙質も他のものと異なり、奥書の一部によると(損傷のため完全な判読は不能)、応仁年間の写本であることがわかる。二巻以下は紙質も一定しているので、年代を明記したものと大体同一のものとしてよい。また、書写年代を明記した巻は以下の通りである。

- ① 応安六年(一三七三) 七巻
- ② 応安七年(一三七四) 一六巻
- ③ 永和元年(一三七五) 三九巻
- ④ 永和三年(一三七七) 一巻

(4) 勸主

頼喜(三二巻まで阿闍梨、以下権少僧都と称している)
⑤ 願主及びその寄進巻数(下表参照)は沙彌、▽は尼を表わす
表の他に、勸主頼喜の名のみあり、願主欄が空白になったままのものが一六〇巻ある。

願主名	署名	筆跡推定 数を含む	願主名	署名	筆跡推定 数を含む
▼ 壽 阿	一〇	二〇	▼ 玉 光	二	三
▼ 覺 成	五	一〇	▼ 大江朝尚	二	三〇
▼ 持 道	二八	六〇	▼ 道 法	一四	一〇
▼ 道 慶	一二	二〇	▼ 道 性	一	二〇
▼ 道 喜	五	〇	▼ 大江朝連	一	二〇
▼ 道 喜	九	〇	▼ 道 忽	一	〇
▼ 淨 喜	〇	〇	▼ 相 喜	一	〇
▼ 大江朝乘	一〇	〇	▼ 道 拓	一	〇
▼ 光 喜	九	〇	▼ 道 喜	一	〇
▼ 六郎二郎	一	?	▼ 道 乘	一	〇
▼ 小 輔	三	五	▼ 道 壽	一	〇
▼ 仙 阿	三	一	▼ 道 乘	一	〇
▼ 光 壽	一	一	▼ 道 乘	一	〇
▼ 彌 阿	九	〇	▼ 道 乘	一	〇
▼ 道 念	四	〇	▼ 道 乘	一	〇
▼ 道 念	三	〇	▼ 道 乘	一	〇
▼ 則 光	一五	〇	▼ 道 乘	一	〇
▼ 福千代丸	四	〇	▼ 道 乘	一	〇
▼ 念 心	三	〇	▼ 道 乘	一	〇
▼ 朝氏朝広	一	〇	▼ 道 乘	一	〇
▼ 重 一	一	〇	▼ 道 乘	一	〇

(6) 書写名

写経者の記名は、表紙と経文の貼付部分の下隅に小さくメモしたもの、末尾に明記したものとの二様式ある(次表参照)。★は末尾に署名を明記したもので、他は表紙裏のメモ。
表の三一人は明瞭なもので、この他判読不能のものも若干ある。以上

のうち特殊な肩書き、あるいは署名方法のものは左の通りである。

- 玄斉：豊州人□玄斉、または豊州円生庄人□玄斉、または林岳玄斉
- 良保：土州良保
- 重融：近江国□岳住侶重融
- 榎窗：江湖非人榎窗

大要」(昭和五年「一九三〇」発行)という小冊子の中に次のような記載がある。

「元弘三年北条氏滅びて漸く建武中興全からんとする時に当り足利尊氏の叛によつて世は再び乱れ畏くも後醍醐天皇は吉野の行宮に崩ぜさせ給う。天皇の一番御末に当らせらるる御子は賊将足利の眼から逃れんとして潜かに高野山に向はせらる。(中略) 随従して上池院へ志す人々は大江朝乗、大江南朝、大江朝代、大江朝広、大江朝尚、大江朝蓮、福千代丸、多聞丸、大式、小補等卅余人。(中略) その年達玄上人を師として御年八才にて剃髪し御名を曾眼、仮名を崇永と名けらる。(中略) 上池院興隆と改築のため諸国に勧請し給う。彼の皇子に随従せる人々卅六人は何れも剃髪し当院の周囲に夫々草庵を建てた。(中略) 崇永聖人は日夜王政復古を祈り給ふに世は返つて賊将足利のみ有利に展開してゆくの備後に御赴錫中油木の八幡神社へ潜かに大般若經六百卷を書写して納むべく立願せらる。尾道西国寺尾崎を止宿所と定め夫々有志のものを交々書写して文中三年から永徳二年迄かかつて奉納せらる。聖人はこの頃お歳が四十九で

あつた(後略)」

この小冊子は参詣者に与える案内用のもので、引用史料も不明である。そこで、先般上池院へ書面にて照会したところ、文書は皆無で、詳細不明の旨回答があつたが、いずれにしても、第一巻の奥書きをはじめ、年代、願主の氏名が符合する所が多く、本写経が高野山関係のものであり、かつ南朝方に志をもつ者の手になつたことは大体明らかである。前記の引用文にしても、当八幡にこの写経の現存することを知つて書いたものではないので、何らかの史料が高野山にあるものと思われる。

(2) 写経に見られる人名

目下のところ勸主頼喜以下全く不明であるが、左の点に解明のカギが藏されていると思われる。

①皇子に從つた公家がそのまま聖人について西国に赴いたとは思われないので、この写経は既にその一部を高野山において着手されていたものを尾道に運んで付近の人々の協力により完成したのではない

か。
②僧侶及び前記の公家は最低一〇巻とまとまつたものを寄進しているが、その他の俗人は小数を寄進しているところから、この完成には寄進者をつのるのにならり苦心し、

かつ、勸主のみで願主名の欠けたもの一六〇巻に及んでいる点からもみて、寄進はすでに南風競わざる不遇の中、苦難に満ちた行事であつたと思われる。

③したがつて最初から当油木八幡を目的とした計画的なものではなく、聖人としてしかるべき大社を目的としていたが、時勢の赴くところ致し方なく油木八幡を次善の地として選んだのではないか。この事は完成から寄進までに数年の空白のあることから思はれる。

④高野山にとつて西国最大の拠点であつた大田庄の西福院ですら、一筆者として労力提供者の地位にあることも、この写経の最初の目的の大きかつたことを物語つている。

⑤全巻通じて崇永聖人の名は見当たらず(第一巻の奥書にはわずかに見られるが、文意不明)、また奥書の願文も形式的で、特別な意図の見えない点、及び年号は北朝年号を使用している点是不審に思われる。

⑥三三〇巻にある「備後国志摩利庄上保八幡常住」(波線部は抹消し、訂正)も前項に準じて頼喜をさすか判明しない。志摩利庄(現三和町小島一带)内に求めるとすれば、三和町字上(旧上村)さすのでは

ないかと思われるが、推定の域を出ない。

以上問題点を列記したが、この大般若経は、単に中世における宗教的遺物としてみる以外に、鎌倉・室町の過渡期における後進辺境の農山村の政治史料としても何らかの価値をもっていると思われる。

ことに建武の中興に際して、いわゆる公家方として義旗をひるがえした土豪がこの神石一带には集中的に出ている訳であるが、それらが如何なる具体的勢力をもっていたか、また、如何なる系譜に連なるものか伝承の域を出ないが、こうした点についても本写経を究明することにおいて何らかの解決が見出し得るものと思はれる。

まとまつた莊園史料を欠く辺境山村の中世史が大きな空白をもっている地方史研究の現況において、この写経は直接中世の雰囲気伝えるものであり、全国をあげての封建再編成動乱の波が、こうした山村にまで波及した証となり、さらには神石地方の中世村落の成立の経緯をも物語るものと思われる。

《付記》史料中に現れる人名及び寺社名などについて、関係あると思はれる史料をご存じの方はご一報ください。されば幸甚です。

旅は道連れ

平田 恵彦

史跡巡りの旅に出る時は一人が多
い。一人旅だと誰にも気兼ねするこ
となく好きな場所に行けるからだ。
その好きな場所というのは、磐座と
か磐境とか祭祀遺跡とかいわれてい
るところで、どう考えてもフツオーの
人に人気のある場所ではない。蛇の
影におののきながら道なき道を分け
入って探し回り、はたまた山の急な
斜面を這いつくばって登り、ようや
く見つけたのが巨岩や石組だけとい
うのでは至極当然である。とにかく
こうした史跡を中心に探訪するとき
は一人旅に決めている。

一人旅は発作的に出かけることが
圧倒的に多い。文献や資料を読んで
いるうちに好奇心をそそられる遺跡
が見つかり、そこが日帰りできる場
所だと——さすがに読んだ翌日とい
うことこそないが——次の休日には
出かけている。こうした場合、下見
をしていないので、うろろろする無
駄な時間も多いが、あちこち探し回
るうちに別の興味深い遺跡に出くわ
すことも多く——ぼくはなるたけ現
地の人に話しかけて情報を得るよう
にしているし、近くの公共機関、た

とえば歴史民俗資料館や教育委員会
などを訪ねるようにしている——そ
れなりに楽しい旅になる。ただ、目
指す遺跡が見つからず、まったくの
空振りだったことも何度もある。

一方、フツオーの史跡巡りをする
ときは、気のおけない数人を誘って出
かけることが多い。理由は簡単で、
複数の旅の方が道中の会話が楽しい
し——某氏はほとんど一方的にしゃべ
りまくるが、それもまたいい——ほ
とんどクルマで出かけるので交通費
は折半してかなり安くすむからで
ある。しかし、こうした旅の場合は
責任があるので、できる限り詳しく
下調べをし、探訪する場所もなるべ
く相手の趣味に合わせるようにして
いる。

山城に登るときは錦ちゃんや矢野
さんを誘うことが多いし、古墳を訪
れるときは山口さんや七森さん、網
本さん、もっと一般的な史跡探訪の
ときは女性会員を誘う場合もある。

いま計画しているのは畿内の古墳
めぐりである。十月下旬に大阪府の
高槻市・茨木市（旧摂津国三島郡）
から山辺の道沿いの古墳を見た後、
橿原考古学研究所付属博物館を見学
して帰るといふものだ。とくに橿原
研の博物館は十数年ぶりに展示替え
をしたということなので楽しみにし

ている。

山辺の道（天理市・桜井市）沿い
の古墳については、多くの出版物が
あるので調べるのにそれほど苦労は
ないが、高槻市や茨木市はたいした
資料が手元がない。こうした場合、
いつも地元のエデュケーションに電話で問
い合わせるようにしている。

高槻市の場合、市立の埋蔵文化財
センターがあるので、最初にここに
問い合わせたが、電話に出た女性の
応対は実に不親切だった。広島から
旅行に行くのでお尋ねしたいと断っ
ているのにもかかわらず、忙しいの
で早く電話を切れといわんばかりの
雰囲気だった。しばし憤然としたが、
気を取り直して、教育委員会の社会
教育課にかけなおした。この時電話
に出た高田さんはとても篤実な人で、
ほとくの無駄話にもずつとつきあつて
くれた。お願いした史跡案内のパン
フレットや資料のコピーも即日送付
してくれ、本当に感謝している。

今回高槻市をコースに入れたのに
は訳がある。この七月に同市にある
安満宮山古墳が発掘された際、一面
もの銅鏡が発見され、その内の一面
（二号鏡）には、魏の年号「青龍三
年（二三五）」銘が入っていたのであ
る。この年号をもつ鏡は数年前、京
都府弥栄町の大田南五号墳からも出

土し、邪馬台国論争に一石を投じた
ことで有名である。安満宮山古墳出
土の青龍三年銘鏡は平縁の方格規矩
神獸鏡だが、他の四面の内訳は三角縁
神獸鏡が二面、斜縁神獸鏡が一面、平
縁神獸鏡が一面で、そのいずれにも文
字が刻まれているのがすごい。高田さ
んによれば、鏡の保存状態はいずれも
良好で、泥を落としたら鏡面がピカピ
カ輝いたという。

実は、安満宮山古墳については、八
月末に同市で調査報告会が実施され
ることを新聞報道で知り、講師陣が
豪華だったのでぜひ行きたかったのだ
が、都合で参加できなかったというう
らみがある。今回はその敵討ちであ
る。

高槻市には他にも有名な古墳があ
る。まず、今城塚古墳（全長一九〇
m、前方後円墳）である。この古墳は
歴史学と考古学の相互研究によって、
継体陵であることがほぼ確定である
とされている。にもかかわらず、陵墓
に指定されておらず、陵墓参考地にさ
えなっていない。どうしてこんなことにな
ったのかというと、江戸時代に実施
された高槻藩の誤った陵墓の比定が、
今もそのまま引き継がれているから
である。なぜ間違えられたのか不明だ
が、今城塚は、その名の通り、中世に
三好氏が山城として使用し、かなりの

改変が加えられているので、当時の人にとっては城址というイメージの方が強かつたのかも知れない。

要するにこの古墳は、墳丘に立ち入ることのできる希少な——後円部にまで入れる古墳と限ると、おそらく唯一の——大王（天皇）陵なのである。現継体陵は今城塚の約一^キ西にある、茨木市の太田茶内山古墳に治定されている。この古墳は今城塚を凌ぐ規模（全長二二六^ミ、前方後円墳）を誇り、北摂津最大の古墳である。したがって、それなりの人物の墓であることは間違いない。

ところで、今城塚古墳と太田茶内山古墳にはともに埴輪が立てられている。実はこの埴輪が焼かれた窯は発掘によって特定できている。二基の古墳からはほぼ等距離の高槻市土室（はむろ、古代、葉室藤原氏が支配していた地域）にある日本最大の埴輪製作遺跡、新池埴輪窯群がそれだ。太田茶内山の埴輪はこのA群窯で焼かれ、今城塚はC群窯で焼かれていたのだ。

これは本当にすごいことで、焼き窯が特定できると、例えば炭素14年代法を利用すると、そこに残る炭を調べれば実年代が推定できる。ただ、これは誤差がやや大きいので学会では賛否両論がある。一方、二つの窯群の地磁気年代を測定した結果は分かっている、

A群窯は西暦四五〇年±一〇年、C群窯は西暦五二〇年±四〇年（継体の没年は五三一年）と考古学で推定できる古墳の年代にほぼ合致している。この新池埴輪窯群は近年「ハニワ工場公園」として復元整備されたのでぜひ行こうと思っている。

もう一つ有名なのは終末期古墳の阿武山古墳である。茨木市との市境に標高二一四^ミの阿武山があつて、古墳は山頂近くにある。この周辺は京都大学地震観測所の敷地内になっているが、その場所に行つても案内板があるだけで墳丘は見られない。

この古墳には盛土が一切なく、地下約三^ミのところは切石組で墓室が造られているからである。その墓室に土を被せて樽（板状の瓦）を葺き、さらに直径五^ミほどの丸屋根を築いてその上に土を被せ、地表と同じ高さにしてある。だから厳密には「墳（土を高く盛り上げた墓の意味）」の文字を使うのは間違いだ。こうした構造をもつ墓は日本では他に発見されていないが、韓国の公州扶余にある陵山里古墳群によく似たものがあるといふ。

阿武山古墳は昭和九年（一九三三）に、京大が地震観測器を埋設する穴を掘つた際に発見された。当時の新聞は「金糸を纏ふ貴人」の墓発

見と大々的に報じて大騒動になったが、軍部の圧力がかかり、埋葬施設や棺の写真撮影が行なわれただけで、本格的な調査は実施されなまま再埋納されてしまった。実はこの時、被葬者はミイラといつてよい状態だったようである。関係者によつて秘密裏にレントゲン写真も撮影されていたのである。

ところがその後、これらの写真は行方不明になり、長い間歴史の闇に埋もれていたが、あることがきっかけで昭和五四年（一九七九）に再発見された。以後五年にわたつて写真原板の修復が行なわれ、当時の様子が見事に蘇つたのである。こうして昭和六一年（一九八六）に阿武山古墳X線写真研究会が結成され、その調査研究の結果、ついに翌年一月、この古墳の被葬者は、藤原氏の祖、大織冠鎌足と発表されたのである。

一般に古墳の年代は相対年代（相対的に新しい古いをいうだけ）で、実際の年号が当てはめられることはほとんどない。しかし、この阿武山古墳では、鎌足の亡くなった西暦六六九年という絶対年代が得られ、古墳編年上の画期的成果となった。

通常、古墳の被葬者が誰であるかも文書による記録か墓誌が出土しないと分からない。現在、被葬者が確実に分かっている古墳は全国で十数基に

過ぎない。天皇陵でさえ例外ではなく、厳しい見方をする学者によれば十基に満たないという。ところが、面白いことにこの高槻市には前述の二基の古墳があり、さらに同市月見町には、被葬者と埋葬年代が分かっている古代の墓がもう一基ある。文政三年（一八二〇）に墓誌が出土し、被葬者名と埋葬年が判明したのである。ただし、奈良時代の火葬墓なので古墳ではない。

これは御史大夫兼行神祇伯正三位石川年足のもので、長さ約三〇^ミ、幅約一〇^ミ、厚さ三^ミの、唐草文様が施された金銅製の縦矩形板に「天平宝字六年（七六二）十二月二十八日」の日付等が記載され、木櫃骨蔵器の中に納められていた。この墓誌は昭和二十七年（一九四七）国宝に指定されている。

さらに、高槻市古曾部町には昼神車塚古墳（全長約六〇^ミ、前方後円墳）という面白い古墳がある。この古墳は墳丘の断面を観察すると二段階で造られていることが分かる。つまり、第一段階で墳丘がある程度形造られ、表土に草が生えてくるほどの時間放置された後、盛土が加えられるのだ。分かりやすくいえば、生前から、半製品の古墳を築造しておき、

被葬者が亡くなった段階で、葺石や埴輪など外表施設を整えたことがわかる古墳、いわゆる寿墓を考古学的に証明しうる古墳として注目されているのである。

この古墳のすぐ近くには、能因法師(三十六歌仙)の墓と伝えられる小塚があり、近接する伊勢寺には伊勢(三十六歌仙)の墓もあつて古今集・新古今集のファンは見逃せない。古墳は他にも弁天山古墳、郡家車塚古墳、番山古墳など数多くある。

また、市内を貫流する芥川中流沿いの三好山には芥川山城跡がある。いうまでもなく、戦国中期、畿内周辺を牛耳っていた三好一族の居城である。

まあ、こんな具合に旅に出る前に未知の土地について色々調べるのが、よくにとつては大きな楽しみなのである。実際、何も知らないで出かけるより、はるかに勉強になるし、資料や文献と突き合わせることで、記憶もより鮮明になる。

今回の旅の道連れはすでに決まっているが、そのうちの一人へ会報に旅行記を書くようにおねがいしているので次号を乞うご期待。

第十一回郷土史講座

河内町の薬師城跡について

豊田郡河内町入野(平賀氏が戦国期、強い影響力を保った地域)には標高三四四・五の龍王山があり、その山頂に龍王山城が築かれています。この龍王山の西麓に土居形式の城があることが知られており、相互の位置関係から龍王山城主の館城ではないかと思われまます。

先般、この薬師城が広島県埋蔵文化財センターによって発掘調査されました。その際、広島県では珍しい大内氏系の土師器類(坏・摺鉢等)や中国産の酒会壺も出土し、この城は一五世紀後半から一六世紀前半にかけてのものとなりまました。また、これらの遺物によつて当時の城主の生活の様子もおぼろげながら見えてきました。

今回の郷土史講座では、篠原芳秀さんに薬師城の最新の発掘成果から判明したこと、推定できることについてお話しいただきます。

【実施要項】

- 《日程》 一月二九日(土)
- 《時刻》 午後二時～四時
- 《会場》 福山市中央公民館
- 《講師》 篠原芳秀さん
- 《資料代》 一〇〇円程度

吉備磐座紀行

バス例会は多くの会員が集うのでも楽しいものですが、欠点は大型バスが入れないところは探訪できないことです。ところが、祭祀遺跡や磐座は何故か大型バスが入れないようなところにばかりにあります。

そこで、今回歴史研はこうしたバスのあまり訪れることのない吉備の祭祀遺跡や磐座を中心に探訪してみようとして「吉備磐座紀行」を企画しました。ただ、会員のクルマに分乗しますので募集人数はごく少数になりますのでご容赦ください。

《探訪予定地》

- 天王山遺跡(賀陽町清水)
- 石置神社と秦麿寺(総社市秦)
- 鬼の岩屋と皇の墓(総社市新山)
- 申庚山(総社市赤浜)
- 岩倉神社(倉敷市瀬口)
- 真宮神社(倉敷市西尾)
- 楯築遺跡(倉敷市矢部)
- 磐岩神社(金光町大三宅) など

【実施要項】

- 《日程》 一月三〇日(日)
- ★雨天の場合は中止します。
- 《集合時刻》 午後七時三〇分
- 《集合場所》 福山駅北口
- 《募集数》 限定一五名
- 《参加費》 実費(二千円程度)

★会員のクルマに分乗します。クルマを出してくださった会員は無料。ガソリン代・高速代を分乗した他の三人で分担します。資料代・保険料を含みます。

《その他》 弁当・飲物各自持。歩きやすい服と靴でご参加ください。

《受付》 平田歴史研副会長宅まで
☎〇八四九―二三―三七八一

石造物分布調査再開

今年五月で休止していた歴史研の石造物分布調査を以下の通り再開します。引き続き加茂町の石造物調査ですが、継続して参加してくださる方だけでなく、新たに調査に参加してみようと思われた方もぜひお集まりください。

- 《年内の調査日程》
- 一月九日(日)
- 一月二三日(日)
- 一月二四日(日)
- 《集合時刻》 午前一〇時

(調査は午後三時ごろまで)

《集合場所》

- 賀茂神社(福山市加茂町芦原)
- 《その他》 弁当・飲物各自持参。

黄河の旅

4

神原正昭

六月二四日朝七時四十五分。臨夏の招待所。中国では国が経営する招待所と言うところが各地にあり、これがいたってサービスが悪い。従業員は公務員とのこと。

本日は臨夏から炳靈寺石窟を見学して蘭州まで長い一日になりそうである。バスは黄土高原の道が狭く舗装もあまりしていない道を、私達が乗ったバスとトラックなどを積んだマイクロボスの二台が時速三十キロで土煙を巻上げながら走る。

このバスは山越えをして峡谷へ出る。道の向こうは黄肌色の準平原状の大パノラマが快晴の空に映え渡る。近くの家々は日干し煉瓦で作られた土の家が、黄土高原の大自然の中に溶け込んでどれが家やら目を凝らしてみないと分からない。ところで現地のガイドが説明するにはこの辺りは観光コースになつてなくて私達が初めてである。この辺りはチベット族の居住区であり、彼らは狂暴な面がありバスなどを取り巻いて石などを投げる恐れがあるのでバスは止まらず、出来るだけスピードを上げて走る。理由としてはガイドとバスの

運転手が漢民族で現在中国ではチベット族との民族紛争が表面化しつつある折り、私達が巻き込まれることを心配しての配慮であろう。私達日本人はほとんど単一民族国家で育ったので大概のことはニッコリ笑つて許されるという甘い認識を持つている。複数民族の社会の中で生きるということを精神的にも肉体的にも身につけていないので異国での日常茶飯事の事件に巻き込まれて大騒ぎをしたり、治安が悪いと手前勝手な理屈や責任転嫁を図ろうとしがちである。こういう所に來て見るといかに自分が小さな社会にいたかがよく分かるような気がする。

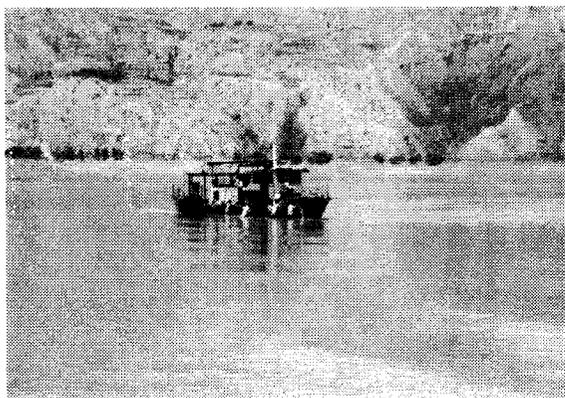
臨夏を出発して約三時間、山の下の方に青く澄んだ湖が見えてきた。一九六〇年代に黄河をせき止めて造つた中国有数規模の劉家峡ダム湖である。

一〇時三〇分、予定通り対岸に渡るためのフェリー乗り場に到着する。対岸まで百メートルもないが、ここで若干のトラブルが発生し、時間をかけてようやく対岸にバスを渡すことに成功する。私達はここで一旦バスと分かれて船で炳靈寺に行く。岸で待つこと約三〇分炳靈寺行き船がやってきた。乗船するのは中国人の母娘と若いカップルと私達だけで

ある。ここで私の認識の甘さがでる。ダム湖を渡るのだから三〇分か長くても一時間くらいだろうと思つてみると、船の上で昼食とのこと、まあいいやビールでも飲むかと思いきや船にはビールなど積んではない。対岸まで二時間三〇分かかると言つている。日本であれば瀬戸内海を往復するくらいの時間である。改めて中国の大きさを思い知らされる。

やがて水面が澄んだ所と黄濁の部分との境界線を越えて黄河本来の川面を進んで行く。ふと見ると漁船が漁をしているのだろうと思つていたら、船が浅瀬に乗り上げ、船に乗っている人達が川に入ってロープで船を引っぱつていく。私達の船もそうならないとは限らず、中国の旅はなにが起るか分からない。そう思ううちに元の深さに戻り両岸の山々もどこか墨絵を思わせるような奇観と変わっていく。やがて黄河はS字にカーブを描きいよいよ炳靈寺である。炳靈寺は四世紀末前後に造つたのであろうと言われている。石窟数が一八三あり、もつとも大きく有名なのが中央の窟舎那仏で高さ十七・一四メートルでこれが黄河の流れに乗って日本の奈良の大仏の原形となつたと言われている。その思いで見ているとなんだか奈良の大仏

さんに似ているように見える。ここで、全員の集合記念写真を撮り終えたと同時に雷鳴とピンポン玉ぐらいの雹が降り始める。国が大きければ雹まで大きいのかと思いいながら岩陰に入る。この石窟は敦煌莫高窟などとはほぼ同時代のものとされているが、インドや西域のものと漠風の様式とが混交している。かつて敦煌に行けなければ炳靈寺に行けと言われたほど素晴らしいシルクロードの石窟である。また、それを実証するかのよう古代のシルクロードで黄河の渡航点がここ炳靈寺石窟付近であつたと言ふ。



一六時三〇分、予定時間を一時間以上も過ぎて炳靈寺を後にし帰路の船旅となる。帰りはダムサイドの船着き場なので三時間かかる。夕闇せまる一九時三〇分、私達は迎えのバスに乗り込み蘭州に向かっていく。蘭州到着二時三〇分、夜店で食事を取り、本日のホテル蘭州飛天大酒店二三時着。長い一日であった。

会報の原稿募集

『備陽史探訪』第八〇号の原稿を募集します。随筆、短歌、俳句、マンガ、歴史に関する小論など何でも結構ですが、一つの号につき原稿は一本だけにして下さい。

タイトル・氏名別で、本文縦書き一六字×(四〇〇)字詰原稿用紙の場合下四字を空けて使用。厳守)二四〇行以内で書いて下さい。写真を含めても、できれば二ページ以内(但し会からの依頼原稿は例外)でお願いします。

締切は十一月十五日(土)、原稿は事務局まで郵送して下さい。

尚、予算の都合や記述内容によっては掲載できない場合があります。予めご了承下さい。

次号は八〇号記念として大増ページで紙面を作ります。

邪馬台国と

銅鏡に思う

種本 実

八月二日の朝刊各紙に、「青龍三年」の年号が刻まれた銅鏡が、大阪府高槻市の古墳から出土した記事が一面に記されていた。

「青龍三年」といえば、西暦三三五年とのこと。邪馬台国の女王・卑弥呼が古代中国の魏へ使いを送り、その時「親魏倭王」の金印と共に百枚の鏡を贈られたのが四年後の景初三年、西暦三三九年であるという。

紙面では魏の年号が記された鏡が新たにこの地で発見されたことから、邪馬台国の位置について畿内説が有力となったとの説が大きく報じられていた。

この大発見の数日前、NHKテレビ「堂々日本史・大胆推理邪馬台国①もし近畿にあつたら」で、三角縁神獣鏡を現代の手で複製したものを見せてくれた。古代と同じ原料、銅とスズと少量の鉛で作られたその鏡は、神や獣や波形等の複雑な模様がある面の反面が正に鏡そのものであった。今までいろんな本で見た写真の銅鏡は、模様面でしかなかったもので、とてもこれが鏡とは思えな

かったが、その裏面が滑らかな面・鏡であったことを、この番組で初めて実感した。

今から千七百年くらい前の、我々の先祖の権力者たちは、卑弥呼もしくは、その後継者から同盟の証に貰ったか、はたまた独自に大陸へ使者を送り下賜されたのかもしれない。鏡に自らを写してどんな思いから見ていたのだろうか。この度発見された銅鏡も、鏡としての滑らかな光沢が思いのほか残っていたという。

「宝」の持ち主である古墳の主は、どんな豪族であったのだろうか。

「青龍三年」の鏡は、方格規矩(ほうかくきく)四神鏡と呼ばれた種類であるが、同時に三角縁神獣鏡も二面発見されたという。丸い鏡の縁の断面が三角形であるこの種の鏡はこれまで全国で四百面以上発見されているそうだ。中国から邪馬台国などへ伝わったとの説に対し、渡来した中国(呉)の人々が作ったとの説がある。

海の日、八名のグループで松江に旅した。目的は、「出雲古代文化展」の見学であった。島根県立八雲立つ出雲風土記資料館には、一九八四年に発見された三五八本の銅剣、昨年十月から十二月にこれも偶然発見された三十九枚の銅鐔などと共に、「景

初三年」の年号を持つ三角縁神獣鏡が展示してあった。

銅鐔と銅剣は、それぞれ発見が大々的に報道されて有名であり、一見の価値は十分あった。鏡も、卑弥呼が魏へ使いをだした年号をもつものは、これまで他に一面しか出土しておらず、この三角縁神獣鏡を目にして胸が高鳴った。どのような経過を経て、今我々の目にふれているのだろうか。

卑弥呼が魏の皇帝からもらった鏡が三角縁神獣鏡であるといわれているが、中国では一枚も見つかっていないこともあって、貰ったのは、中国でも出土している方格規矩四神鏡ではないかとの説もある。

それにしても、卑弥呼の時代、三世紀の日本のことを記した書物といえば、三国史時代の中国の歴史書・魏史倭人伝の他にないのだろうか。当時、大陸への窓口であった朝鮮半島からも古代の日本列島の様子を伝える文献が出てきてよさそうなのだが、それに、大陸と交流のあった邪馬台国に、文字が伝わり使用されていたことは十分可能性がある。ならば、その時代の墓から文字を記した遺物が発見されるのでは、と想像するのだが、あの吉野ヶ里遺跡からも文字は発見されなかった。今後

の出土に期待したい。

三世紀の日本に文字の使用はありえないとする見方が一般だが、魏の皇帝が「親魏倭王」の称号と金印を授けるほどの国が、文字の使用もないう未開の地であるはずがない。三角縁神獸鏡は日本で作られたものであるとの説を、今から三十五年も前に述べた森浩一氏も同様に、「詔書にあたる以上、それを受けとる相手国は文字を読めるという前提で対処したと考えるのが素直だ」と述べている。(古代史の窓・新潮社)とすれば、西暦五十七年に後漢の光武帝から「漢倭奴国王」の金印を授かった倭国にも、文字を理解する文化があったと言うことになるのだが？

邪馬台国の存在地について、九州説、畿内説、他百家争鳴の学説に、新たな発見と考古学によってピリオドが打たれるのはいつのことだろうか。邪馬台国に君臨した女王・卑弥呼の人となりについても知りたい考古ファンは多いことだろう。

大和朝廷の前身が邪馬台国であるとの説が有力だが、邪馬台国がなぜ東遷しなければならなかったのかは知りたい。それだけのエネルギーを費やすほどの必要性とは…。北九州では大陸の影響を受けすぎるとか日本列島の中心部へと移動したとい

う説を聞いたがどうも納得出来ない。

およそ科学とは無縁の弥生時代に複雑な模様面と、美しい光沢面をもつ直径二十センチほどの金属は、当時の人々にはこの世のものとは思われなかったであろう。そう思うとき大自然を畏敬し、他の動植物と共存する素朴な生き方であった。我々の祖先に愛しみを感じる。そして、今日のごとく自然を破壊する生活を顧みて、人類の繁栄もいつまで続くだろうかと思わずにおられない。

学説の証明や興味本位で、遺跡をやたらに発掘することは先祖の霊に對し冒瀆である。やはり、卑弥呼は永遠のペールに包まれたシャーマンであっていい。そう思いつつも、今後の偶然の出土に期待しながら想像を巡らすとき、煩わしい雑事に追われる現実をしばし忘れることが出来るのである。

まろぎ石

藤井節子

大國主の靈の依り代かも知れぬ朱の円き磔を手にとりてみる。
出雲人らの神と崇めし石まろぐあは
き朱の色こころに抱く

杉原氏の 出自に関する私見

木下和司

通説では杉原氏は備後生え抜きの武士で国衙在庁官人として勢力を伸ばした一族とされている。しかし、南北朝初期の杉原氏の中には幕府奉行人を務めた人物がいる。例えば、「雑訴決断所沙汰條書」(「建武年間記」所収)の奥州引付一番に合奉行として杉原七郎入道が記されている。また、南北朝期の惣領杉原光房には室町幕府引付奉行であった確証がある。「結城文書」には康永三年(一三四四)三月に行われた幕府引付方の編成替えを示すと考えられる史料が残っており、引付方五番に杉原左近將監の名がみえる。この左近將監が光房に比定される根拠は「浄土寺文書」(暦応三年(一三四一)十月二十三日付け「足利直義下知状」の中に、「相尋守護人細川刑部大輔頼春・杉原左近將監光房之処」なる文言があることに依る。

た。その結果、光房の祖父にあたる杉原主計允親綱に幕府奉行人の確証を認めることができた。
鎌倉幕府問注所執事であった太田時連の公務日誌で現存する永仁三年(一二九三)五月二日の条に「且は安富大藏丞、杉原主計允、太田三郎を執筆に入れるべきの由、同じく仰せ出されおわんぬ」とあって、杉原主計允が引付方の執筆に加えられたことが分かる。鎌倉時代末に成立したと考えられる幕府訴訟手続きの入門書である「沙汰未練書」によれば執筆とは引付衆中の記録人のことだと説明されている。また、文保二年(一一三二)十月の「尾張富吉庄雑掌申状案」(「壬生家文書當局所領」)には「永仁六年(一二九六)に焼失した関東下知状を杉原主計允親綱を奉行人として写しを作成した」と書かれており親綱が引付奉行人であったことが確認できる。
以上から、杉原氏は鎌倉時代に幕府奉行人を務めた家系である可能性が高いと思われる。しかし、今のところ杉原氏の中で鎌倉時代に奉行人としての足跡を確認できるのは親綱だけであるから、杉原家が代々幕府奉行人であったと家系だとは断定できなない。もう一つ杉原氏が鎌倉時代から幕府奉行人であった可能性を示

唆する史料として、杉原氏の同族・大和氏にも鎌倉時代後期に奉行人を務めた人物を確認できることがあげられる。『尊卑文脈』によれば大和氏は杉原氏と同じく伊勢平氏に属する家系で、杉原氏の祖先平の兄弟・行平から分かれた家系である。

大和氏の中で幕府奉行人を務めたことを確認できるのは、鎌倉時代末期に属する大和政盛とその養子盛秀の二人である。盛秀については嘉暦元年（一二二六）八月廿日付け「鶴岡八幡宮相撲奉行猿渡盛重子息盛信和与状」（『金子文書』）に「一番引付大和右近将監政盛を奉行人として」とある。

また、盛秀については元徳二年（一三三〇）三月廿四日付け「金沢貞顕書状」（『金沢文庫所蔵文書』）に「大和右近大夫（政盛）嫡子佐渡太郎左衛門を合奉行に加える」とある。

以上の考察から、杉原氏は備後生え抜きの武士というよりも「尊卑文脈」にみえるように伊勢平氏の流れをくみ、幕府奉行人を務めた家系と考えた方がよいと思われる。

今後より詳細に鎌倉期の史料を調査して精密な論証を試みてみたいと考えている。

事務局だより

めっきり秋らしくなって参りましたが、会員の皆様には如何お過ごしでしょうか。秋は文化にスポーツに何をすることも最高の季節です。

さて、この良き季節に当会では瀬戸町の史跡巡り、庄原市の雲井城登山会等多彩な行事を用意しております。会員の皆様には振るってご参加下さい。

事務局日誌

○八月九日（土）

「古事記を読む」参加一七名
○八月三十日（土）郷土史講座

「芦田川上流域の古墳について」

講師 山口古墳部会部会長

参加 三十九名

場所 福山市市民会館

○九月六日（土）古墳講座Ⅳ

「笠岡市郷土館見学会」

参加 二十名

○九月十三日（土）

「古事記」を読む

参加 二十名

○九月二十日（土）

「備後古城記」を読む

参加 十一名

○九月二十一日（日）

古墳部会 秋の古墳めぐり

「世羅台地の古墳をめぐる」

参加 四十八名

○九月二十七日（土）

掛迫古墳調査報告書作成会

場所 喫茶ホウセン

○九月二十八日（日）

第9回郷土史講座

「応仁以降の備後の争乱」

講師 小林浩二さん

参加 五十三名

○十月四日（土）古墳講座Ⅳ

金江古墳群と天津磐境見学会

参加 二十二名

○九月三十日（火）役員会

参加 十一名

新入会員紹介

備陽史探訪の会へようこそ

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため
掲載できません。

今後の定期講座

「古事記」を読む

日時 十一月八日（土）午後二時

場所 中央公民館会議室

資料代 一〇〇円程度

「古城記」を読む

日時 十一月十五日（土）

午後七時

場所 中央公民館会議室

資料代 一〇〇円程度

編集後記

秋の気配が日一日と濃くなってきています。丸一日ゆつくりと読書をしたい季節ですが、時間なく困っています。（遵行使節沙弥）

備陽史探訪の会事務局 ☎七二〇

福山市多治米町五十一十九一八

☎〇八四九（五三）六一五七